

東京・山谷でみとりの家を続ける

やまもと まさき 山本 雅基 さん(41)

ひと



東京・山谷地区に、身寄りのない人の終のすみか「きほろのいえ」を建てて3年。すでに、26人の男女をみとった。21の個室は福祉事務所からの紹介でいつも満室。うち

6割は路上生活の経験があり、がんやエイズ、重い糖尿などの病気を抱える。当たり前なことができずに生きてきた人が多い。やってみたいことを聞き、かなえて、花見がしたい、銭湯に行きたい、浅草で買い物があったい……。元歌手という肺気腫の男性は、「ギターを弾きた

い」だった。手渡すと、息がうつ状態になり、1年間実家にこもった。「家がなければ、自分も路上生活だな」と思ったとき、行き場のない人の家づくりが頭に浮かんだ。看護師の妻と父からの出資、借金やキリスト教会の寄付が設立資金。入居者の生活費にそれぞれの生活保護費をあて、運営費は寄付でまかなう。訪問介護の公的サービスや、学生や僧侶ら約10人のボランティアに支えられる。

「おはよう、と穏やかにいえる朝を迎えられたら。人生を生き直す場でありたい」

文・荒 香帆里
写真・郭 允